

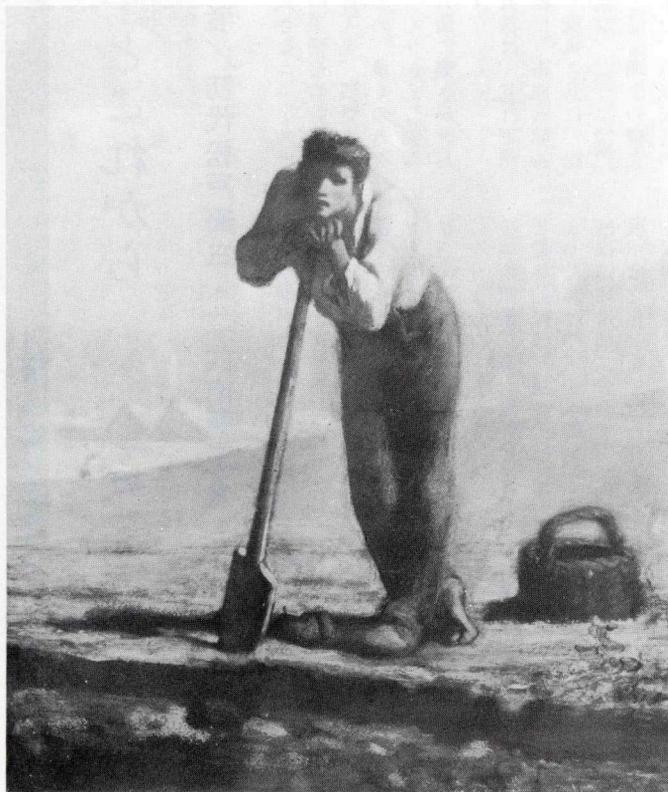
みる つくる がたる

ミレー 休息する農夫

一八五〇年頃
油彩・キャンバス

一八四九年パリに流行したコレラを避け、バルビゾンに移ったミレーは、やがてこの土地に深く魅了され、妻や子供たちと終生とどまり、自然の中で労働する農民の生活を描き続けた。

この作品では、厳しい労働の中で、つかの間の休息をとるひとりの農夫の姿があらわに描き出されており、ミレーの特質が充分反映された作品となっている。一八六三年にサロンに出品した「鋤を持つ男」も同じモデルを使っているが、このモデルはドイツ人の季節労働者で、ミレーの作品にしばしば登場している。



ミレー「休息する農夫」

観潮台

県立美術館が開館して十年、時の流れの早さに驚きます。その間歴代の職員や関係者の方々の御努力により、着実な歩みを続けてきましたが、十周年を契機として更に一層発展することを念願します。▼臨海公園の整備も進行中であり、京葉線の開業も具体化し、美術館を取りまく環境は漸次整いつつあるようです。県立美術館が、

本県における美術活動の拠点としての機能を十分に発揮するため、財政事情の厳しい中ですが、館の当初計画に基づき、展示棟の増設・専門職員の増置充実が実現されるよう願っています。▼最近、全国各地に美術館づくりが進められ、「美術館乱立時代」などといわれていますが、他館の協力も得て優れた企画展を積極的に実施してほしいと思います。▼また、県内にも市立美術館建設の動きが出てきましたが、県立美術館は、これら美術館のモデルとなるよう資料の整備や各種活動の充実に努めることが望まれます。▼私共も民間人として、できるだけ協力するとともに、美術館の前進に期待しています。(県立美術館友の会会長 鈴木民三)

特集 (開館十周年記念座談会)

県立美術館の十年とこれから

その一・これまで

出席者／初代松戸節三・二代市原正夫・三代高橋在久の各館長十現館長平野 馨

司会—本日はお忙しいところお集まりいただき恐縮です。

本館は御承知のように、昭和49年に開館し、10周年を迎えるわけですが、本館開設以前も含めまして、これまでを回想していただき、今後、千葉県立美術館はどうあるべきかについてお話を伺いしたいと思えます。

さっそくですが、まず本館の創立前後のことにお詳しい高橋先生からお話ししていただきたいと思えます。

高橋—一番思い出しますことは、美術館開館以前は、県展の時期になりますと、毎年のように会場、すなわち美術館



松戸 節三氏

建設問題が大きなニュースとなり、当時の美術会の幹部であられた藤野天光、浅見喜舟両先生をはじめ、多くの方々から20年余り、くりかえし美術館建設を各方面に働きかけられたこととす。

美術館設置後は、私は副館長として、松戸、市原両館長にお任せし、職員と共に、松戸館長の時代は、『美の広場』の施設整備と経営理念の確立で終始し、また、市原館長の時代は、その『美の広場』の完成への努力と具体的な事業の確立に献身し、浅井忠を核にした美術館を夢見たつもりです。

司会—松戸先生は初代館長としまして、お骨折りが多かったと存じますが。

松戸—私が県立美術館という名前を初めて聞いたのは、私が国体局(若潮国体)の次長になった時で、競技種目の中

に美術展示という、ひとつの公開演技がありまして、これを当時の知事さんが県立美術館をつくって、そこでやるのだとおっしゃられ、それから県立美術館に関心を持つようになりまして。しかし、その後美術館建設地が難航しまして最終的には、現在の所に決まったわけですが、結局、開館は国体に間に合わず、芸術展示は文化会館で行われました。

やがて、国体が終りまして私に美術館長をやれという話がありまして、お引き受けしたのですが、私が美術館に来た当時は、展示棟がおおむね出来ており、今の6室のところに机などを運びまして、どうやら事務室らしい形を一旦整え、発足したような状況でした。そして、開館準備を進めていくなかで、私は全員が館長になったつもりでやって

ほしい、みんなで美術館の進むべき方向を見い出そうと話しまして、浅井忠を中核とすることや、館報の名前を『みる・かたる・つくる』にすることなどを決めていったのですが、これは、まぎれもなく高橋さんのアイデアだったんです。そんなわけで、高橋副館長と10名前後の職員におんぶされながら、また、美術会の方々の御協力でどうにか開館にこぎつけることができました。

開館後は、管理棟完成促進のために各方面へお願いしましたが、予算の面でも、なかなか満足できるものでなく、また、県民アトリエの方も棚上げの状態でした。

そんなわけで、当時は、みんなで力を合わせて乗り越えたような気がします。

司会—市原先生も二代目館長としまして、同じような御苦



市原 正夫氏

労があったと存じますが。

市原—私は51年度から54年度まで館長をおおせつかったわけですが、管理棟が完成したのが松戸先生が去られる直前の51年2月なんです。いみじくも、私も全く同じように、県民アトリエを55年3月に完成させて、高橋さんにバトンタッチしているわけです。建物は異なりますが、たどってきた美術館の施設づくりのひとつの歴史がでていると思います。ですから、私に課せられた問題は、県民アトリエを完成させていただくことでした。また、駐車場、芝張り、彫刻の屋外展示などの外構工

事も大きな仕事で、これと関連するのですが、館の入口にある浅井忠像を多くの方の御厚意で建設し、生垣・植栽その他の環境整備もなされていったことが思い出されます。

また、美術品取得基金条例をつくっていただいたことや普及室の創設なども印象に残っています。

しかし、何ととっても、松戸さん、高橋さんが、地域に根ざした美術館”として、浅井忠をメインにしたことと、

”みる・かたる・つくる”という運営の基本方針を打ち出したことは、この千葉県立美術館が誇り得るものだと考えます。

それから、やはり印象深いのが、「東山魁夷展」ですね。夜間公開までやりまして約四万人の入館者があり、大きな反響がありましたね。

司会―高橋先生、三代目館長としまして、特に力を入られた点につきまして。

高橋―松戸、市原両先生から私の名前を出していただいていたへん面はゆい気持ですが、ただ、当時は、美術館の经营理念の確立と具体化というところを模索しながら、先祖組という意識、歴史をつくるのだ

という情熱で、館長さんを中心に職員と議論し、その結果、”みる・かたる・つくる”という三つのことばに要約できたわけですね。

また、市原先生時代も基本的に同じで、事業の具体化・組織化に苦心しました。

ですから、三代目の私は、ただ両先生が示された軌道を、より広め、実のあるものにしたと願ったまでです。

現在、美術館の「国分寺時代」といわれるなかで、開館当初からの浅井忠を軸とした歩み方が、例えば、『朝日ジャーナル』などで真つ当に評価されたこと。また、「浅井忠記念賞展」の成功などは、歩んできた個性化の10年間で決した無駄ではなかったという印象を持つわけです。

司会―市原先生は、先生の考察が現在どのように展開されているとお考えでございましょうか。

市原―先程も申しあげました



高橋 在久氏

が、本館は開館以来、資料の収集・展示の柱を浅井忠にし、また、運営の姿勢を”みる・かたる・つくる”にしたことはすばらしいことで、今日までそれが引き継がれてきたことは誇りにしてよいことだと思います。とかく、経営者や行政担当者がかわつたりすると美術館の姿勢がかわつたりしがちなんですが、これから先、10年、20年、30年と引き継がれていかなければいけないものではないかと思えます。そういう点で、千葉に行けば、いつでも浅井忠の作品や資料を見ることができるといふ常陳された記念室というか展示・資料室がほしいですね。そうすることによって、この館が基本的な方針のもとに10年間歩んできたという具体的な姿を示すことになると思えます。

高橋―私も全く同感ですね。思想と方法は確立されていますから、是非、展示棟と収蔵庫などの基礎から具体化してほしいと思います。

司会―松戸先生が、当初お考えになられた未来像と10年後の現在の姿を比較されて、いかがでしょうか。

松戸―私が美術館を去って8年が過ぎたわけですが、美術館に来るたびに、よく整備されてきたなあという感じと、新聞などで展覧会の記事を見るたびに、よい企画をしているという感じを持つわけですが、今後、展示棟の増築がどうなるのか、また、臨港公園ができたときに、この美術館がどうクローズアップされ、どう利用されていくかを将来の展望に立って、この美術館が生きていく方策を考えてもらいたいと思います。

司会―先輩館長さんのお話を伺って、県立美術館10年の歩みに対する現館長としての御感想をひとつ。

平野―お話を伺いしながら伝統といえますか、歴史の重みを感じました。と同時に、私自身、その重みに押しつぶされないように、未来に向けて新たな気持で努力しなければ



平野 馨氏

ばならないと思います。

基本的には今後も地域性は大事にしていきたいと思えますし、一方では、その地域性をふまえながら、国際的な視野も広げていかなければいけないと思えます。ただ、国際性といいますが、それは地域とか県民を忘れた独断的なものではなく、いつも多くの人々に理解され、親しまれるものであることが基本だと考えています。

それから、先程話題となりました館の質的向上、展示・収蔵等の施設の充実、臨港公園等の周辺の環境整備に伴う館利用者の量的拡大を図ることなど、果敢に取り組んでいきたいと思っております。今後ともよろしく御指導の程、お願いいたします。司会―本日はどうもありがとうございました。

司会 中地昭男

(於 美術館 59・8・10)

みる (展覧会)

自然との交流

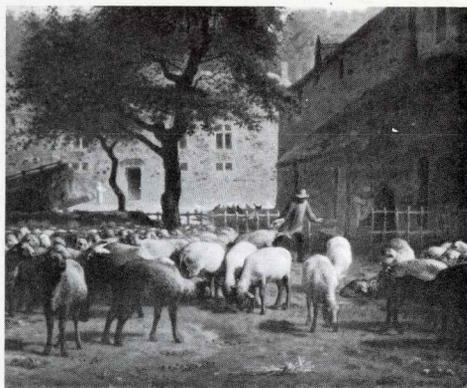
ミレー、コロ、クールベ展

昭和五十九年九月一日(土)

〜十月十日(水)

本館は昭和四十九年に開館して以来、各種の展覧会を開催してきましたが、今年度十周年を迎え、さらに一層の展覧会の充実をはかり、国内はもとより海外のすぐれた美術作品に親しむことのできる機会を提供していきたいと考えています。

今年度は、そうした企画の一環として、特別展「ミレー、



ミレー「毛を刈られた羊」

コロ、クールベ展」を開催することとなりました。これまでも近代フランス名作版画展やカナダ風景画展など国際的な展覧会を企画してまいりましたが、ヨーロッパ十九世紀絵画に焦点をあて、油彩、パステル画、デッサン、版画等多岐にわたる作品を一堂に



コロ「柳の木のそばで牛を見張る農婦」

展覧する大規模な国際展は初めてといつてよいでしょう。ミレー、コロ、クールベというヨーロッパ近代美術の展開において大きな足跡を残した三人の作家を中心に、バルビゾン派及び関連作家あわ



クールベ「波」

せて二十五作家、約百点の作品を初公開のものも含め、ご覧いただきます。十九世紀ヨーロッパでは、科学が飛躍的な進歩を遂げ、実証主義的精神やフランス大革命後の近代市民社会の成立



ルソー「フォンテンブローの森」

における個人主義の確立に伴い、絵画は新たな展開を見せ種々の思想が生まれました。特にフランスは、絵画革新の中心舞台となり、近代絵画への道を切り開いていった作家が輩出しました。一八三〇年頃から、パリ近郊のフォンテンブローの森西部に位置するバルビゾン村を中心に若い画家たちが集ま

りましたが、その主な画家、ミレ
ー、コロイ、ルソー、ディア
ズ、トロワイヨン、ジャック
デュブレ、ドービニー等は従
来の神話画、宗教画、歴史画
と異なる美の世界を開拓しま
した。彼等は自然の穏やかな
風景やそこに集う動物たち、
あるいは農民の日常生活を描
き、戸外の光と大気の微妙な
変化を画面に反映せました。
またクールベは、徹底した写
実主義を標榜し、新しい価値
観を表明し、現実を目に向け
生活感情に溢れた作品を生み
出しました。彼らの画風は、
次の印象派をはぐくむ大きな
素地となり、更に近代絵画の
形成に影響を与えました。我
が国においては、明治初期に
工部美術学校の絵画教授とし
て本格的な洋画をもたらした
フォンタネージがバルビゾン
派の流れをくみ、浅井忠、小
山正太郎、松岡寿等明治の洋
画の基礎を築いた作家達がそ
の指導を受けています。

(藤川正司・小泉幸代)

主な作品

ミレー

- 「休息する農夫」(油彩)
- 「鶏に餌をやる女」(〃)
- 「洗濯する女」(〃)
- 「乳しぼり」(〃)

- 「毛を刈られた羊」(油彩)
- 「古い石垣」(パステル画)
- 「道」(〃)
- 「種をまく人」(版画)
- 「落穂拾い」(〃)
- 「耕す人」(〃)
- コロイ
- 「イタリアの女」(油彩)
- 「フォンテンブローの風景」(〃)
- 「ヴィル・ダブレーの池」(〃)
- 「柳の木のそばで牛を見張る農婦」(〃)
- 「ナポリの浜の思い出」(〃)
- クールベ
- 「まどろむ裸婦」(油彩)
- 「もの思うジブシー女」(〃)
- 「エトルタの断崖」(〃)
- 「雪の中の小鹿」(〃)
- 「波」(〃)
- ルソー
- 「フォンテンブローの森」(油彩)
- ドービニー(シャルル)
- 「オワーズ河の夏の朝」(油彩)
- ドゥミエ
- 「水飲み場」(油彩)
- トロワイヨン
- 「サン・クルー公園」(油彩)
- ジャック

「森の羊飼いと羊」(油彩)
会期 九月一日(土)〜十月十日
(水) 月曜日休館(九月
二十四日は開館し、翌
日休館)

開館時間
午前九時から午後四時
半まで(入場は午後四
時まで) 但し、金曜日
は午前九時から午後七
時半まで(入場は午後
七時まで)

なお、会期中に「美術講演
会」と「第三回美術を語る会」
を開催しますので、御参加く
ださい。

●美術講演会
日時・場所
九月十六日(日) 午後二
時から美術館講堂にて。
演題
「ミレー、コロイ、ク
ールベとバルビゾン派」
講師
島田紀夫氏(実践女子
大学助教授)

●第三回美術を語る会
日時・場所
九月二十九日(土) 午後
二時から美術館研修室
にて。
演題
「日本人とバルビゾン
派」
話題提供者
丹尾安典氏(早稲田大
学講師)



館長と記念撮影するカナダの作家達

忘れられた作家の展覧会を
開くには、多様な困難を伴う。
都鳥英喜展もその類に属した
が、それだけに各方面からの
反響が大きく、いくつかの目
新しい情報も寄せられた。作
品の発見や都鳥の年譜を埋め
る事項を教えていただいた。
展覧会開催に向け常に調査

「カナダ・アルバータ州現代美術展」終る
企画展「カナダ・アルバータ
州現代美術展」は、去る六月
十九日(火)から七月八日(日)まで
開催された。六月十九日のオ
ープニングには、県教育長、
出品作家、カナダ大使館、カ
ナダ側関係者らが出席し、友
好的雰囲気の中で行われた。
この展覧会は、国際相互理
解と親善に努めている芸術海

研究を行うが、正直言って十
分とは言えない。展覧会を開
き、それを契機に新しい発見
が生まれる。展覧会がひとつ
の導入口となって、新たな調
査研究への出発となる。都鳥
英喜の調査研究は、多く残さ
れている。
(前川公秀)

四月二十七日〜五月二十日

外交交流会との共催、カナダ大
使館、カナダ・アルバータ州政
府の後援を得て実現したのも
で、日本ではなじみの少ない
カナダの芸術が広く紹介され
たため、大きな反響を呼んだ。
展示作品は、アルバータ州
芸術家協会が「芸術交流」の
テーマのもとに審査・選抜し
た三十一作家、四十四点で、
版画、水彩、油彩等の独特な
手法で制作されたものや、カ
ナダの自然が詩情豊かに表現
されたものが多く、会期中約
七千人の入場者でにぎわった。
また六月十九日午後開かれ
た「美術を語る会」には、来日
した出品作家ら十三名、一般
参加者約三十名が出席し、日
本とカナダの芸術を語り合い
友好を深めた。(大久保守)

かたる・つくる

(美術を語る会・実技講座等)

第八回美術館

夏季大学好評

去る7月27日・28日、第八回美術館夏季大学を開催した。一日目は版画、二日目は彫刻をテーマに、大沢実氏(浮世絵史研究家)、遠藤健郎氏(洋画家)、大須賀力氏(彫刻家)、戸田禎佑氏(東大教授)を講師に迎え、一二〇名の参加者があった。

実技講座の案内

◎七宝焼入門講座

期日 10月6・7日
講師 長南光男氏

◎書芸入門講座

期日 10月23・24・30・31
11月6・7日

◎彫塑入門講座

期日 10月27・28・11月3・4・9・10・11日

講師 青木三四郎氏
◎洋画(人物)研修講座
期日 10月31・11月1日
12月5・6日

講師 渡辺晋氏
◎日本画研修講座
期日 11月24・25・12月1・2・16・17・18日

◎デッサン(裸婦)入門講座

期日 11月27・28・29日

◎てん刻入門講座

講師 遠藤健郎氏

期日 1月12・13日
講師 靈園鴻甫氏
◎デッサン(静物)入門講座
期日 2月16・17・18日

◎書芸研修講座

期日 2月予定
講師 浅見錦龍氏

※申込みは、初日から二週間
(てん刻は一か月)前までに
往復はがきで学芸課普及班
あてお申し込みください。

第1回現代日本具象彫刻展募集始まる

八〇年代は「文化の時代」といわれています。千葉県においても「房総文化懇談会」を設置し、ふるさと文化の新たな創造をめざした提言が今春発表されました。いま千葉県は五〇〇万県民時代を迎え、豊かであるおのがあるふるさとづくりが進められています。その一つが、地域と生活に根ざした新しい県民文化の創造なのです。

文化の香り高いふるさと千葉づくりの一環として、県が千葉市青葉町に県立の都市型総合公園設置の準備を進めています。この公園は「自然と人間が共存する新しい都市林の創造」を主眼としています。この公園に五〇〇万県民記念事業のひとつとして、文化性の向上を図るため彫刻の広場を設け、ここに野外展示される彫刻を全国公募することになりました。県と県教育委員会の共催による本県初の全国公募の彫刻展「第一回現代日本具象彫刻展」がそれです。大賞作品(六ポイント以内)の中から、後年度千葉県が高さ二・五m程度の金属又は石などで野外彫刻作品として制作し青葉の森公園の彫刻の広場に設置する予定です。

募集要項から
▼テーマ「二一世紀への飛躍」
▼出身県、経歴、年令不問。
▼具象的な野外彫刻のためのエスキースで昭和五七年二月以降の制作で未発表作品。
▼素材不問。底面積二m×高さ一・五m以内。一人一点。
▼搬入日時 一二月七日(金)一二月九日(日)、午前一〇時午後四時。場所は県立美術館。▼大賞六ポイント以内(副賞各七〇万円)

入選点数は未定。
▼作品展示 入賞及び入選作品を昭和六〇年二月二日(土)二月二十四日(日) 県立美術館にて展示公開します。
▼審査員 小川正隆、嘉門安雄、弦田平八郎、富山秀男、中村傳三郎、本間正義、三木多聞の七氏(五十音順)
▼問い合わせ先 現代日本具象彫刻展実行委員会事務局(〒二六〇 千葉市中央港一〇一〇) 千葉県立美術館内 電話 〇四七二(四二)八三二二 (米田耕司)

浅見喜舟氏 去る七月十八日午前八時三十五分、肺ガンのため千葉市の県立ガンセンターで逝去、八十六歳。
書星会長、県美術会長。当館協議会議長、友の会顧問。
明治三十一年群馬県藤岡市生れ。本名錦吾。木俣曲水に師事。千葉大学教授等を歴任。本県の書道と美術界の振興に寄与。昭和三十七年千葉県文化功労者。当館の設立と発展に多大の功績があった。
五十八年当館で開催した、「房総の美術家シリーズ13 浅見喜舟展」が初めてで最後の個展となった。

日誌抄

- 5.12 美術を語る会(1) 話題提供者 青柳嘉忠氏
- 5.25 タイ国ベンクラブ会長 ニラワン女史来館。
- 6.8 関東地区県立博物館等副館長会議
- 6.22 美術館友の会美術鑑賞の旅(館山方面)
- 7.9 第一回美術館協議会
- 7.23 博物館実習 参加者18名(7・28まで)
- 8.7 第二回現代日本具象彫刻展実行委員会